

[成果情報名]有機栽培に適するチャ新品種「せいめい」、「さえあかり」

[要約]農薬不使用条件において、「せいめい」は、炭疽病・網もち病ともに発生は少なく、収量は慣行防除と同等である。「さえあかり」は、炭疽病の発生は少なく、網もち病の発生が認められるが、収量は慣行防除と同等である。両品種は有機栽培への適応性が高い。

[キーワード]農薬不使用条件、品種、せいめい、さえあかり、有機栽培

[担当]鹿児島県農業開発総合センター・茶業部・栽培研究室

[代表連絡先]chashisai@pref.kagoshima.lg.jp

[分類]普及成果情報

[背景・ねらい]

チャにおける有機栽培は、慣行栽培に比べ病害虫の影響を受けやすく、耐病性を持つ品種を選定することが安定生産につながる。当県育成の「あさのか」等は有機適応性が高いことがすでに知られているが、近年、主要病害に対して耐病性を持つ新品種が育成されており、有機栽培への適応性が高いことが期待される。

そこで、鹿児島県農業開発総合センター場内圃場で、近年育成された新品種の農薬不使用条件における耐病性や収量性を評価する

[成果の内容・特徴]

1. 「せいめい」は、農薬不使用条件で、炭疽病の発生は少なく、網もち病の発生はみられるが、発生程度は低い（図1）。収量は、慣行防除と同等である（図2）。
2. 「さえあかり」は、農薬不使用条件で、炭疽病の発生は少なく、網もち病の発生がみられるが、発病葉数は「あさのか」より少ない（図1）。収量は、慣行防除と同等である（図2）。

[普及のための参考情報]

1. 普及対象：茶生産者、普及指導機関。
2. 普及予定地域・普及予定面積・普及台数等：全国茶産地。
3. その他：
 - (1) 「せいめい」は、てん茶品質が優れ、有機てん茶に向く品種、「さえあかり」は、有機栽培でも多収で安定的な生産が可能な品種として期待できる。
 - (2) 「さえあかり」は、網もち病が多発する地域では銅剤による防除が効果的である。
 - (3) 「有機栽培「あさのか」の網もち病の発生低減技術（2021年普及情報）」を参考にする。
 - (4) 試験は当センター知覧ほ場で二番茶後に深刈り更新し、2か年（2021～2022年、2022～2023年）同一ほ場で行った。「せいめい」の収量データは2023年、「やぶきた」は1か年（2021～2022年）のみの試験である。
 - (5) 二番茶期のチャノミドリヒメヨコバイの発生は、2か年とも少発生（殺虫剤不使用）で、他の害虫による目立った被害はなかった。
 - (6) 慣行防除体系は下表のとおり

防除時期	殺虫剤（希釈倍数）		殺菌剤（希釈倍数）	
再生芽	テッパン液剤（2021年）	（1,000倍）	クプロシールド（2021年）	（500倍）
	アグリメック（2022年）	（1,000倍）	ダコニール1000（2022年）	（1,000倍）
再生芽摘採後	—		カスミンボルドー	（1,000倍）
秋芽1回目	コテツフロアブル	（2,000倍）	フロンスайдSC	（2,000倍）
秋芽2回目	アルバリン顆粒水溶剤	（2,000倍）	インダーフロアブル	（5,000倍）
秋芽3回目	—		コサイド3000	（1,000倍）
二番茶前	ウララDF	（1,000倍）	クプロシールド	（500倍）
	ディアナSC	（5,000倍）		

注）散布量は200L/10a

[具体的データ]

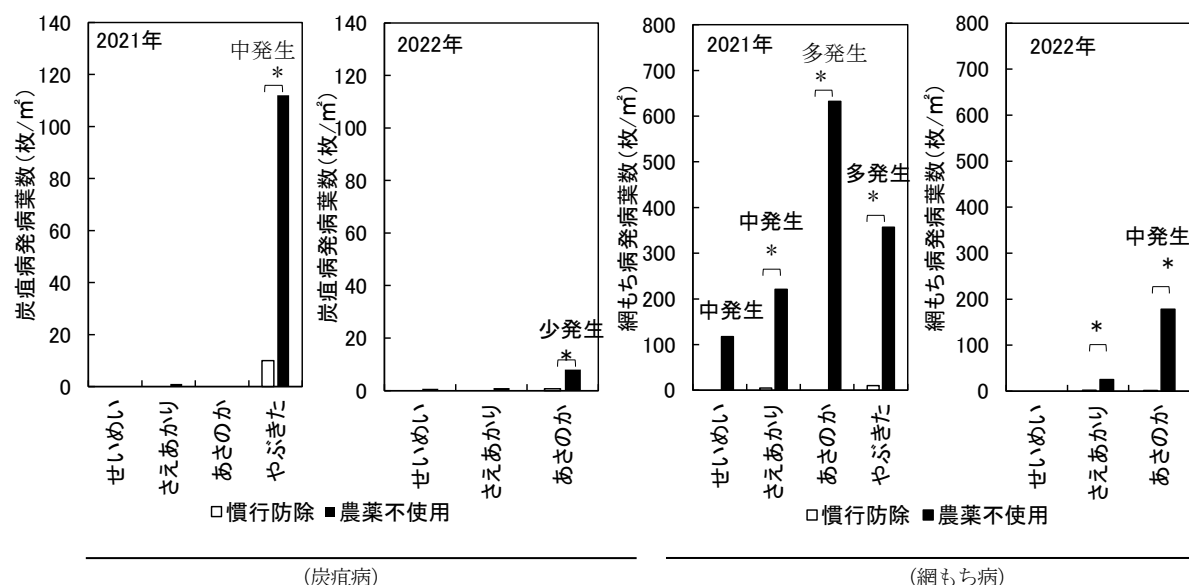


図1 農薬不使用条件が各品種の炭疽病・網もち病の発病葉数に与える影響（秋整枝後）

注1) 調査は、秋芽3回目の防除後64～74日後に行った

2) 図中の発生程度は、無農薬条件での発生程度である（日植防基準）

3) *は、各品種の防除の有無間に5%水準で有意差があることを示す（交互作用が有意であり、Bonferroniの補正で下位検定、図2も同じ）

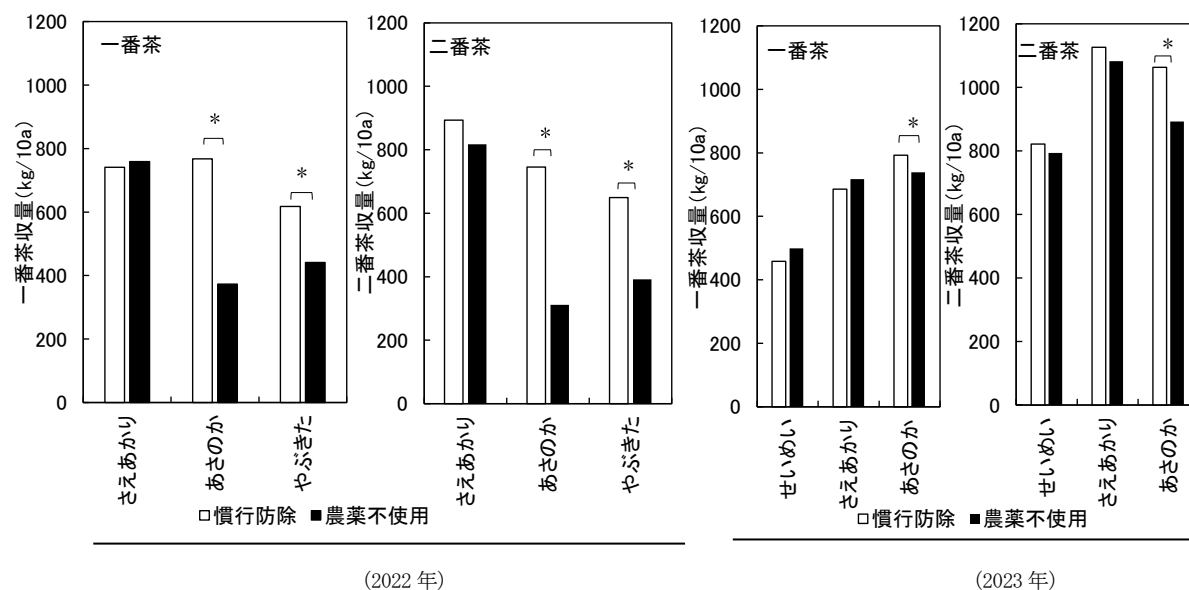


図2 農薬不使用条件が各品種の一番茶、二番茶収量に与える影響

（鹿児島県農業開発総合センター 伊地知仁）

[その他]

予算区分：県単

研究期間：2021～2023年度

研究担当者：栢木琢磨、伊地知仁（鹿児島県農総セ）

発表論文等：鹿児島県農業開発総合センター（2024）「令和5年度普及に移す研究成果集」

<https://www.pref.kagoshima.jp/ag11/pop->

tech/nenndo/documents/documents/113040_20240418191801-1.pdf